

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（3）アシネ¹

高橋 裕子

Early Iron Age Sites in Greece (3) Asine

TAKAHASHI Yuko

This paper is the third in the series “Early Iron Age Sites in Greece.” It focuses on Asine in the Argolid. It reviews the materials from the site and discusses the issues of the cultural affinity between the Middle Helladic Period and the Early Iron Age, burial customs, religion, iron production etc.

はじめに

ギリシアの初期鉄器時代に関しては埋葬資料が多く、集落址は数が少ない。筆者はかつてエウボイア島レフカンディに関する業績の中でその居住区であるクセロポリスについて紹介したことがあるが、それは当時の居住および生活の実態を多少なりとも具体的に知ることができる稀有な存在である²。

ただしレフカンディは、初期鉄器時代の遺跡として必ずしも典型的な例ではない。それは青銅製品の製作や他地域との交流や交易に関する際立った特質においてのみならず、集落の中心となるべきアクロポリスが存在しないという形態的な側面においても同様である。

そこで本稿においては、アクロポリス、墓、そして宗教関連資料という初期鉄器時代の集落として主要な要素がそろっているアルゴリス地方のアシネをとりあげたい（図1）。アシネの資料を詳しく見ていくことは、この時代の集落というものを理解するための基礎的作業として有益であろう。

第1章 調査史

アシネは長らくスウェーデンが調査をしてきた遺跡として知られているが、その歴史は1920年にさかのぼる。この年の秋、スウェーデンの皇太子グスタフ・アドルフがギリシアを旅行し、その際にアシネも訪れて関心を抱く。それ

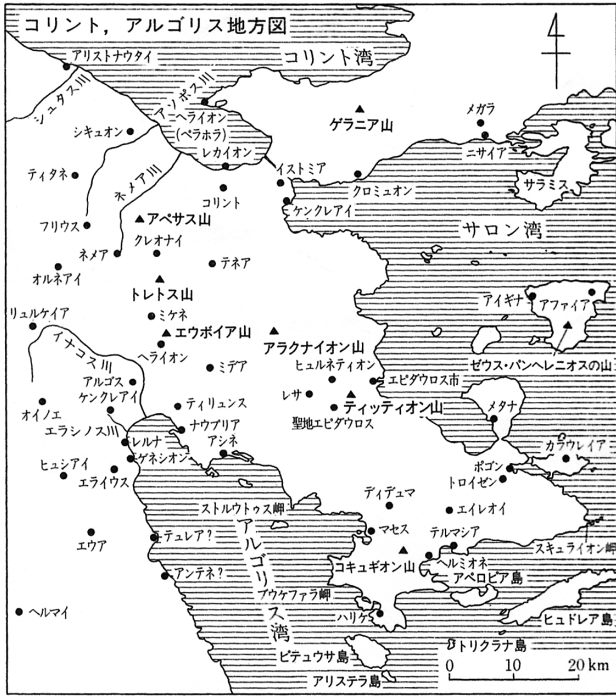


図1 アルゴリス地方およびその周辺図

(出典：パウサニアス『ギリシア案内記』(下) 馬場恵二訳、岩波文庫、1992、16)

以降現在に至るまで、スウェーデンがこの遺跡の調査の主導権を握ることとなった。

アテネにあるフランスの研究所 (École Française d'Athènes) の一員でもあったスウェーデン人研究者A.W.パーソンを介してフランスが小規模な調査を行ったあと³、1922年からスウェーデンが本格的な発掘を開始する。1924、1926そして1930年と数年おきに調査が行われ、大量の遺物や遺構が発掘された⁴。当時の遺物の相当数はスウェーデンにおいて収蔵および保管されており、その数は5000~6000箱に達するという⁵。土器片や骨片など多種多様な資料が含まれているが、残念なことに、その大半は未発表である⁶。そしてこれだけ多量の資料を有している強みを生かして、現在においてもアシネはスウェーデン人研究者の牙城といっても過言ではない存在となっている⁷。

その後ほぼ四十年間の空白期間を経て再び1970年以降スウェーデンによる調査が行われるようになり、バルブナのレヴェンディス⁸やアクロポリス（カストゥラキ）から東方に位置する調査区⁹での発掘などが実施された（図2）。1990年にもアクロポリスにて二つのトレンチが発掘されている¹⁰。これらのことから明らかなように、ギリシアの考古局による緊急発掘も若干数行われてはいるが¹¹、アシネは事実上スウェーデンの独壇場と言えるであろう。

さらにアシネの調査開始以降、スウェーデンはデンドラやベルバティ、ミデアなどアルゴリスの他の重要遺跡も手がけることとなる¹²。それにより、ミケーネを調査するイギリス、ティリンスのドイツ、アルゴスのフランスらと並んで、スウェーデンはアルゴリスにおける主要調査チームを擁する有力国の一員として確固たる地位を築いていくこととなった。

第2章 遺跡の概要

アルゴリス平野の南東部に位置するアシネは（図1）、長期に渡る人的活動が確認されている海岸沿いの著名な遺跡である。調査が開始されてから70年が経過した1992年には、1989年の発掘の概報の中で、新石器時代の遺物が確認されたことが初めて公けとされ、この集落が石器時代にまでさかのぼることが明らかとなった¹³。

続く青銅器時代に関しては初期、中期、後期のいずれの時代に関しても資料が確認されており、とりわけ次章で記すように中期青銅器時代と後期青銅器時代の重要な遺物や遺構が豊富に発掘されていることで知られている。これらの時代に関しては、コロナを中心にエーゲ海の重要拠点として繁栄を謳歌していたアイギナ島の土器が出土していることも知られており¹⁴、土器の生産および交易という課題についての重要な資料として注目を集めていることも特筆にあたいしよう¹⁵。

中期および後期青銅器時代に比するとやや目立たないようにも感じられるが、初期青銅器時代の人的活動の痕跡も1920年代から確認されており、その後も、たとえばバルブナの調査区レヴェンディスがそうであるように¹⁶、相当数の資料が発見されている¹⁷。

また文字史料にも言及があり、たとえば『イリアス』のいわゆる「軍船のカタログ」では、アルゴスおよびティリンスに続いて「深い入り江を抱くヘルミオネ、アシネの二市」¹⁸と記載されている。周知のようにホメロスの描く社会の年代に関しては研究者の間で意見が分かれているが、「軍船の

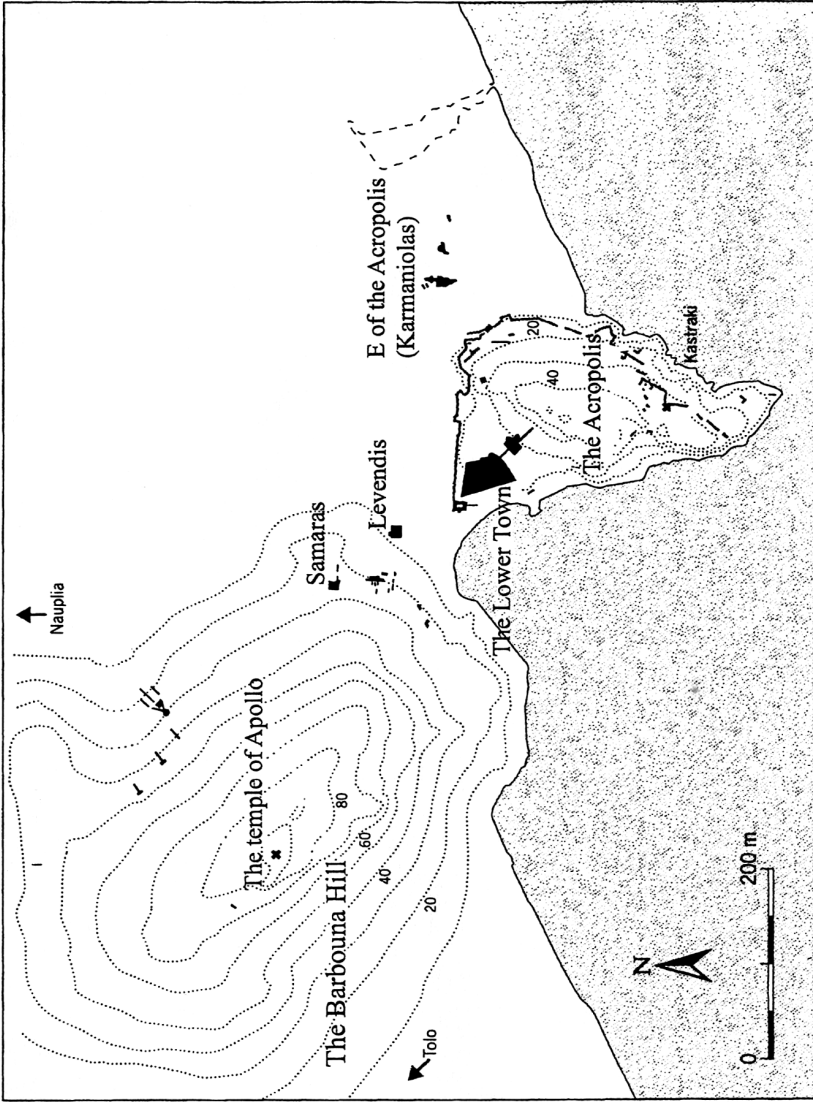


図2 アシネの遺跡全体図および調査区 (出典: Backe-Forsberg & Risberg 2002, 86, Fig. 1. 一部修正)

カタログ」に言及されているという事実そのものがアシネの勢力の大きさを物語っている。

アシネの集落には、重要な丘が二つ存在する（図2）。一つ目は海岸から突き出たカストゥラキと呼ばれる丘で、新石器時代においてはまだ独立した島であった¹⁹。ここがアシネのアクロポリスと一般に見なされている場所であり、集落の中核的存在であった。ヘレニズム時代には、この丘の縁辺部に城壁が建造された²⁰。

またこのアクロポリスの北西部の裾には、1920年代に発掘された低部市街地（The Lower Town/City）と呼ばれる調査区が広がっている。本稿の対象である初期鉄器時代の研究においても、重要な場所である。

そしてこのカストゥラキと並んで重要な存在であるのが、アクロポリスの北西方向に位置するバルブナという丘である。頂上には聖域を、そして北東側の斜面には後期青銅器時代の横穴（岩室）墓群を擁し、また南東側の裾部にはレヴェンディスとサマラスという調査区が存在する。

さらにカストゥラキ（アクロポリス）から東方へ多少離れた場所でも発掘が行われており、アクロポリス東方調査区（East of the Acropolis）または土地の所有者名からカルマニオラス（Karmaniolas）区と称されている。ここでは1970年代に、デンマーク人考古学者S.ディッツも加わって調査が行われた。

パウサニアス（2.36.4-5、3.7.4、4.8.3、4.34.9-11）にも言及があるとおり、アシネは初期鉄器時代の終わりごろにアルゴスに攻撃および破壊されたと推測されている²¹。かつてはその後数百年にわたって集落全体が放棄されたと見なされていたが、現在では前古典期や古典期の遺物や遺構も発見されており、それらの時代も完全に荒廃したわけではないことが確認されている。たとえば著名なところでは、バルブナの聖域からはアルゴスの破壊よりもあとの年代の資料が出土している²²。

さらにヘレニズム時代になると、軍事的重要性から再び活発な人的活動が認められるようになり²³、先にも記したように、アクロポリスに城壁も築かれた²⁴。また、たとえば後400年頃に建造されたと推測される低部市街地の浴場のように²⁵、ローマ時代の資料も発見されている。

以下、まず次章においては初期鉄器時代との関係という観点から、中期青銅器時代と後期青銅器時代について見ていきたい。そのあとは時代順に、第4章で後期青銅器時代IIIC期と亜ミケーネ期、そして第5章で初期鉄器時代に焦点を当てる。そして最後に第6章にて鉄生産に関して記していきたい。

第3章 中期および後期青銅器時代—初期鉄器時代との関係性という視点から

アシネが大きな注目を集めてきた時代に中期青銅器時代がある。カストゥラキを中心に大規模な集落が営まれ、一説によれば最大で300~500人ほどの人口をかかえていたとも推察されている²⁶。ギリシア考古学の概説書において中期青銅器時代の代表的な集落として取り上げられるほど²⁷、この時代のアシネの繁栄は注目にあたいする。

建造物を含む多種多様な遺構や遺物が豊富に発見されているが、とりわけ埋葬資料はこの時代の研究に大きな役割を果たしてきた。低部市街地を中心に複数の調査区から少なくとも150基前後の墓が発見されており²⁸、さらにそこから出土した160体前後の遺骨も重要な研究対象とされている²⁹。墓のタイプは基本的には一基に一人の遺体を埋葬する単葬墓であり、堅穴の壁に板石や礫が配されているタイプが一般的である(図3)。遺体は横臥屈葬の状態で見つけられていた例が多い。また塚も発見されている(図4)³⁰。

中期青銅器時代の資料は1920年代の調査当時から重視され、報告や研究文献が陸続と発表されてきた³¹。その上さらに2003~2008年にかけての5年間、オランダの研究機関および大学を中心に中期青銅器時代のアルゴリスに関する学際的なプロジェクト(Middle Helladic Argolid Project)が組織され、レルナやアルゴスと並んでアシネが大きく取り上げられたことにより、その重要性はより強調されるようになった³²。このプロジェクトの成果報告は幾つも発表されているが、それによりアシネの中期青銅器時代に関するより詳細な具体像が明らかになったと同時に、当該期の繁栄ぶりがあらためて認識されるようになったと言えるであろう³³。

中期青銅器時代が終焉を迎え後期青銅器時代へと社会が移り変わると³⁴、アシネにも大きな変化が現れる。ギリシア世界一般に看取されるように、後期青銅器時代においては複数の遺体を埋葬する複葬墓が主流となり、アシネでも横穴(岩室)墓が造営されるようになった³⁵。

この後期青銅器時代のアシネの墓域は、中期青銅器時代とは異なり、バルブナの北東および北側斜面に造営された。北東斜面に設けられたのが「ミケーネ時代の墓域I(Mycenaean Necropolis I)」であり、26基(もしくはそれ以上)の墓から構成されており、その内7基が発掘されている。一方で北側斜面の方が「ミケーネ時代の墓域II(Mycenaean Necropolis II)」で、24期の墓が発見されているが発掘されたのは1基のみである³⁶。

調査された横穴墓の中で、大きさ、遺物の豪華さや出土量さらには注目度な

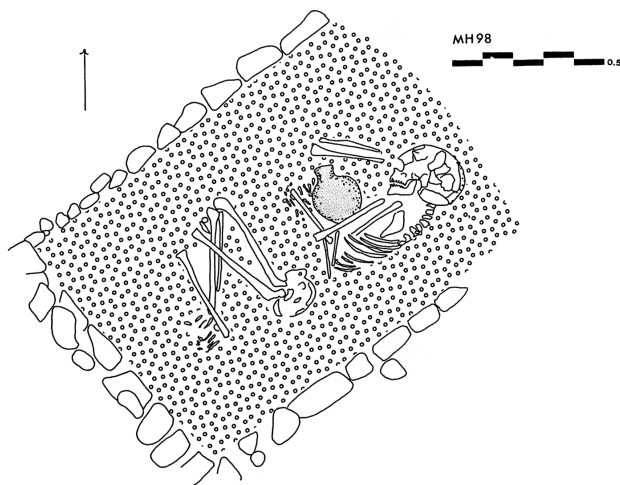


図3 中期青銅器時代の墓（出典：Nordquist 1996, 34, Fig.21, MH98）

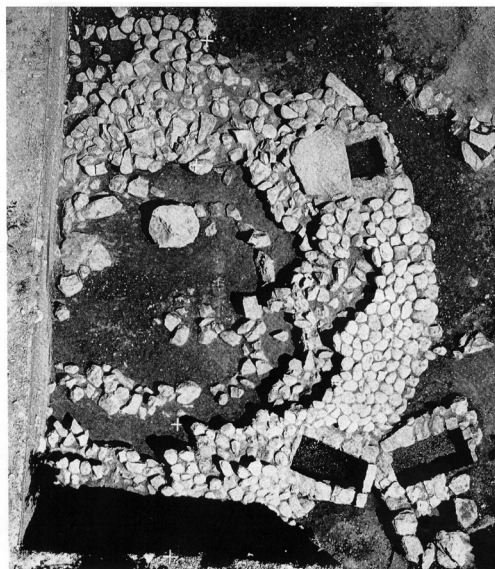


図4 アクロポリス東方調査区の中期青銅器時代の塚と墓
（出典：Styrenius 1998, 18, Fig.5）

ど、すべてにおいて群を抜いた存在であるのが「ミケーネ時代の墓域 I」の 1 号墓 (TI: 1) である (図 5)。墓室は不整形であり、また例外的に羨道 (ドロモス) が二つある。北側の羨道が 8 m、南側が 9.7 m あり、墓室への入り口は礫で封鎖されていた。後期青銅器時代 IIB ~ 亜ミケーネ期にかけての土器が出土しており、長期にわたって使用されていたことが確認されている。また金や銀製品、ファイアンス、象牙など豪華な副葬品が出土しており、被葬者たちの社会的地位の高さを推察させよう³⁷。

墓以外の資料としては、たとえば低部市街地から後期青銅器時代の土器の窯と推察される遺構も出土している³⁸。おそらくは小規模ながらも、自分たちの集落で土器を生産していたのであろう。また牛をかたどった土製小型像 (フィギュリン)³⁹ を扱った業績など、この時代に関する幾つもの報告や論文が発表されているが、それらは当該期におけるアシネの繁栄ぶりを示唆している⁴⁰。

このようにアシネは後期青銅器時代においても大集落であったが、しかし今のところ、この時代における勢力の指標とも言えるトロス墓は発見されていない。確かに「ミケーネ時代の墓域 I」の 1 号墓は、大きさにおいても遺物の豪華さにおいてもトロス墓に匹敵する存在とも評価できようが、やはりあくまでも横穴墓であって、トロス墓と同質のものとして論じることには無理があろう。トロス墓という形態の墓に埋葬される被葬者が社会的序列の中で極めて特権的な立場にいたことは想像に難くない。少なくとも現今の資料状況においてはそれを欠いているという事実は、当時のアシネの政治および社会体制、さらに

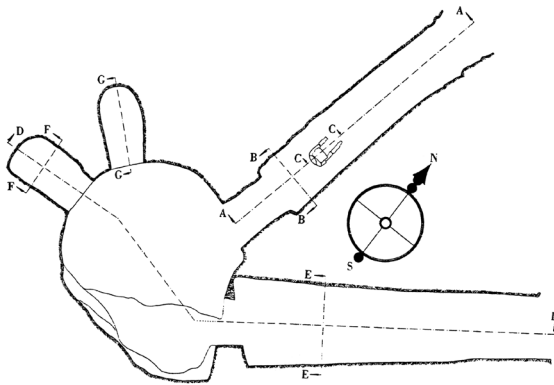


図 5 「ミケーネ時代の墓域 I」 1 号墓平面図 (出典: *Asine I*, 156, Fig.134)

はアルゴリスにおける勢力上の地位を考える上で見逃してはならない重要性を有している。

またアシネからはトロス墓のみならず線文字Bの粘土板も発見されておらず⁴¹、ミケーネやティリンスに比べればアルゴリスの中で劣勢な立場にあったと判断されよう。おそらくアシネは、ミケーネ時代においてアルゴリスの諸集落の中では最上級に属する存在ではなかった。

ところがミケーネ文化崩壊後、初期鉄器時代に入ると急速に勢力を伸長させ、アルゴリスを代表する大集落へと成長していく。そして注目すべきことに、初期鉄器時代においてアシネと覇権を競いあい結局この集落を破壊することになったアルゴスも、同様の推移をたどっている。アルゴスの勢力規模を通時的に見てみると、中期青銅器時代における繁栄、その後の後期青銅器時代に関してはトロス墓の未発見に象徴される第一級の集落とは評価しえない状況、そして初期鉄器時代における大発展というアシネと同様の経路を看取することができる⁴²。

中期青銅器時代と初期鉄器時代の繁栄と後期青銅器時代におけるやや抑制された勢力状況というアシネとアルゴスの共通点は、初期鉄器時代を研究する者にとって大に関心を持たれるところである。というのも、初期鉄器時代と中期青銅器時代とは共通点が多い一方で、後期青銅器時代（またはミケーネ時代）はこれら二つの時代とは相違点が多いことが指摘されているからである（図6）⁴³。またアシネに関して言えば、中期青銅器時代と初期鉄器時代とでは埋葬場所に関しても低部市街地など共通点が多いのに対して、後期青銅器時代には両時代とは全く異なるバルブナの北東および北側一帯に墓域が造営されて

	中期青銅器時代	後期青銅器時代／ ミケーネ時代	初期鉄器時代／ 暗黒時代
馬蹄形の 建造物	他の形もあるが、馬蹄形も一般的に使用	長方形が主流で、馬蹄形は少数派	長方形などもあるが、馬蹄形の例も豊富
土器の文様	幾何学文様が中心	動植物などの図柄が豊富	幾何学文様が中心
墓制	被葬者が一人の単葬墓が一般的	岩室墓やトロス墓などに複数の遺体を葬る複数葬が優勢（単葬墓は少数派）	単葬墓が広範に普及（岩室墓などへの複数葬は少数派）

図6 中期青銅器時代と初期鉄器時代との間に類似性がみられる諸要素
（拙稿「鉄の時代へ」103の表と同内容）

いる。アシネの初期鉄器時代の葬制は、墓域の場所という点においても、後期青銅器時代よりも中期青銅器時代のそれと相似性がある。

初期鉄器時代におけるアルゴリスの二大勢力であるアシネとアルゴスがともに中期青銅器時代に繁栄し、そしてミケーネ時代にはトップクラスには属しない存在であったということは、少なくともこの地域においては、繁栄するための条件が中期青銅器時代と初期鉄器時代との間には一定の共通性がある一方で、ミケーネ時代においてはそれが異なっていた可能性があるのではないか。

この問題に関しては、今後も検討を重ねていきたい。

第4章 後期青銅器時代IIIC期および亜ミケーネ期

後期青銅器時代IIIB期の末にミケーネ文化が崩壊すると、ギリシア世界は激動の混乱期を迎えることとなる。多数の集落が放棄されたり資料数が減少したりするなど、不安定で弱体化した社会状況が一般に見て取れる。

ところがこのような時期においてもアシネからは人的活動の痕跡が確認されており、青銅器時代の終末期から初期鉄器時代にかけて途切れることなく居住された遺跡として名高い⁴⁴。たとえばアクロポリス東方区の建造物70Q-Tに関しては、ミケーネ文化が崩壊した直後の後期青銅器時代IIIC期、続く亜ミケーネ期、さらに次の原幾何学文様期にかけての連続した居住が推察されている⁴⁵。

そこで本章においては、青銅器時代最終末期の後期青銅器時代IIIC期、さらに青銅器時代から鉄器時代への移行期とも言える亜ミケーネ期に焦点を当て、若干の資料や業績を紹介していきたい。

(1) 後期青銅器時代IIIC期

後期青銅器時代IIIC期に関してもアシネからは相当量の資料が出土している。特殊な事例としては、バルブナで発掘されたヘレニズム時代の墓からこの時期の土器が発見されたことがある。おそらく後期青銅器時代IIIC期に墓の副葬品として埋納されたものがヘレニズム時代に見つけ出され、副葬されたのであろう⁴⁶。

これは例外的な事例であるが、後期青銅器時代IIIC期に関する居住や埋葬といった一般的な資料もかなり発見されており、ミケーネ文化が崩壊したあとでもアシネがある程度の人口をかかえた集落であったことが推察される。そしてこの時期の資料の中でもとりわけ有名な遺物が、「家屋G (House G)」から出土したいわゆる「アシネの領主 (“the Lord of Asine”）」(図7)であろう。



図7 「アシネの領主（“The Lord of Asine”）」
 （出典：D'Agata 1996, 42, Fig.1）

1926年に低部市街地から発見された「家屋G」はIIC期の使用が確認されている建造物で、その主要な部屋であるXXXII号室（Room XXXII）からは宗教関連の遺物が出土したことで注目を集めてきた。この部屋からは炉や宗教的機能を持っていたと推察される石造りのベンチが発見されており、遺物としては土器や「アシネの領主」のほかに五個の土製像（フィギュリン）などが出土している。この部屋が公共の宗教施設であったのか、もしくは個人的なものなのかなど、その性格をめぐる議論がある⁴⁷。

XXXII号室の出土遺物の中でも最も有名な「アシネの領主」は、高さが12cm、頭部の頂上が直径6.9cmの中空の土製像である。時期は後期青銅器時代IIC期の中期と推測されており、胴体部分が発見されていないため、全体ではどのような形であったのかということを含めて分析の対象とされてきた。髪型がクレタまたはキプロスで製作された想像上の生き物の像に似ていることから、それらの地域との関係が推察されており、「アシネの領主」も胴体部分は動物の形をしていた可能性も指摘されている⁴⁸。

ところで「アシネの領主」に関して関係が推測されているクレタとキプロスは、双方ともに地中海交易の中継地としての地の利を有する島であった。ギリシア世界が多くの技術や物質を通時的に取り入れてきた地中海東部との接触や交流、交易という点において、必要不可欠な場所である。後期青銅器時代IIC

期に関してアシネとそれらの地域との関連が示唆されるという点は、大きな重要性を持つ。

というのも、やはりアルゴリス地方の重要集落であったティリンスの当該期に関するクレタとの関係が指摘されているからである⁴⁹。そしてこのティリンスも、アルゴスやアシネには及ばないが、初期鉄器時代において繁栄を謳歌している。ということはミケーネ文化崩壊直後のIIIC期におけるクレタ（さらにはキプロス）との関係は、おそらくはその集落におけるその後の盛衰にも関わる重大な要素であったのではないか。

このように「アシネの領主」は、青銅器時代終末期における宗教や他地域との関係を探る上で貴重な資料である。報告書 (*Asine* III.1) の表紙に図が採用されていることが、その重要性を端的に物語っている。建造物や墓域のみならずこのような遺物が出土していることが、当該期の研究におけるアシネの存在をさらに強調する結果をもたらしている。

また「家屋G」のXXXII号室からは、亜ミケーネ期や原幾何学文様期の土器も出土している⁵⁰。すなわち、青銅器時代終末期から鉄器時代にかけての居住の連続性が確認されるという点においても重要な遺構であるということになる。となると、初期鉄器時代に入ってからこの部屋の機能がいかなるものであったのか、引き続き宗教や信仰に関わりがあったのかという点などが問題とされよう。

(2) 亜ミケーネ期

青銅器時代から鉄器時代にかけての移行期に当たる亜ミケーネ期に関しては今なお編年体系に議論があるが、その研究史上においてアシネは一定の役割を果たしたと言える。そしてそれには、亜ミケーネ期に関心を抱いていたC.G.ステュレニアスが発掘に携わっていたことが、大きく影響している。

1970年に調査が再開されたとき、ステュレニアスはアテネにあるスウェーデンの研究所の所長の任に就いていた。それにより、アシネ（アクロポリス東方調査区）で緊急発掘の必要性が生じた際に、ギリシアの考古局より調査を指揮するように招かれ、担当することとなる。当時、とりわけアッティカ以外の地域においては、亜ミケーネ期を独立した編年区分として認めるか否か諸家の間で見解が分かれていたが、ステュレニアスは1967年に出版した著作の中で、アルゴリスにおいてはそれが認められるという意見を提出していた⁵¹。

このような背景のもとにアシネの調査を担当することになったステュレニア

スは、発掘の初年度からアクロポリス東方区における青銅器時代から鉄器時代にかけての移行期に関する層位に強い関心を抱いていたと思われる⁵²。そしてその後、1970年以降のアシネの発掘では亜ミケーネ期が層位的に立証されたことと概報などでいち早く発表したことにより、この遺跡の当該期に関する注目が集まった⁵³。さらに1982年には報告書 (*Asine* II.1) の中でも、アシネにおいては亜ミケーネ期は層位的に確認された一つの時期区分であるという認識を提示している⁵⁴。

ところがその後1986年に、ステュレニアスではなく別の研究者 (B.S.Frizell) により、アクロポリス東方区の当該期に焦点を当てた報告書 (*Asine* II.3) が発表される。そこでは「亜ミケーネ」という用語は使用されておらず、独自の編年区分が提唱された。それも手伝ってこの業績は、アシネの報告書としては珍しく、強い批判を受けることとなり⁵⁵、現在においては亜ミケーネ期に関する研究において重要な役割を演じることはほとんどない。

また報告書の出来不出来の問題を除いても、P. マウントジョイが記しているように、アクロポリス東方区における亜ミケーネ期の資料が層位的に確認されるか否かという点に関しては、疑問視される傾向が強い⁵⁶。このような状況ではあるが、それでも亜ミケーネ期の諸問題に関する研究史の一時期においてアシネが注目を集めたことがあるという事実は、明記されてしかるべきであろう⁵⁷。

またたとえ層位的に認められないにしても、アシネからは亜ミケーネ期の資料がある程度発見されていることは確かである。ただし後期青銅器時代IIIC期に比べれば少量であり、この時期に集落規模は縮小したと見なしえよう。

さらに注目すべきことに、アシネからは亜ミケーネ期の埋葬資料がほとんど出土していない。今のところ、「ミケーネ時代の墓域 I」の1号墓 (TI: 1) から亜ミケーネ期の土器が発見されているのみである⁵⁸。当該期に関しては一般に埋葬資料が主流であるがアシネは逆であり、珍しい事例であろう。この時期の墓の発見に関しては、今後の調査に期待が託される⁵⁹。

(3) 移行期における社会

先に記したように、アシネは青銅器時代終末期から初期鉄器時代にかけての居住の連続性が確認するという点において著名な遺跡である。それでは、ギリシア世界全般において大規模な混乱や社会変動を看取しうるこの移行期に、アシネの集落は大きな変化を経験することがなかったのかというと、それは慎

重に検討する必要がある課題である。

たとえば墓域の場所を見てみると、ミケーネ文化が崩壊した後であっても後期青銅器時代IIIC期においてはまだバルブナの北および北東斜面に設けられた横穴（岩室）墓が使用されていたが、初期鉄器時代に入るとそこは放棄され、底部市街地やアクロポリス東方区などで埋葬が行われるようになる。また墓の形態も単葬墓へと変化する。青銅器時代終末期から初期鉄器時代への移行期に埋葬場所も墓のタイプも変化するといふかか現象は、アルゴリス平野の遺跡に共通して認められるものであり、アシネもそれに準じている⁶⁰。

一方でアテネ中心部のアゴラでは、初期鉄器時代に入るとやはり単葬墓への移行は確認されるが、しかし埋葬場所は後期青銅器時代の墓が営まれたところであり移動はしていない⁶¹。ということは、アシネの埋葬システムの方がアゴラのそれよりも大きく変化したと言える。なぜそれ以前の墓域や墓制が捨てられてこのような変化が生じたのか（または、なぜこのような変化が必要とされたのか）、その理由は不明であるが、かかる現象はアシネの集落が政治的ないしは社会的に大きな変化を経験したことを推察させる。

たとえ居住そのものは途切れることなく継続されていたとしても、それは同質の政治または社会体制がそのまま存続したことを意味するわけではない。アシネはミケーネ文化崩壊後の青銅器時代終末期から初期鉄器時代への移行期にかけて、他のアルゴリスの集落同様に、大規模な社会変動に見舞われたと言えるであろう。

第5章 初期鉄器時代

本格的な鉄器時代に入った原幾何学文様期になると、アシネは急速に勢力を伸長する。初期鉄器時代でも前期である原幾何学文様期に既に、アルゴリス平野においてはアシネとアルゴスの二大勢力が群を抜いた存在であった。

一般に初期鉄器時代に関しては埋葬資料が豊富で集落址は数が少ないが、アシネからは居住の痕跡も発見されている。おそらく当時の居住の中心はアクロポリスであったが、さらにアクロポリス東方調査区からも原幾何学文様期の建造物が発見されており、鉄器時代に入ってから間もなく集落が繁栄を謳歌し始めたことをうかがわせている⁶²。

この時代に関しては多量の遺構や遺物が発掘されているが、以下、葬制、宗教関連の資料、他地域との関係に焦点を絞って、若干のことを記したい。

（1）葬制

アシネからは初期鉄器時代の墓が多数出土している。低部市街地やアクロポリス東方調査区、レヴェンディスなど、集落内に幾つもの墓域または墓群が存在したことが知られている。副葬品がないため詳細な年代決定が不可能な例も多いが、それでも埋葬資料は初期鉄器時代のアシネに関して重要な知見をもたらしてくれる存在である⁶³。

初期鉄器時代のアシネの葬法は土葬であり、墓は被葬者一人を葬る単葬墓である。不整形な場合もあるが、長形状の堅穴を掘り、壁面に板状の石や礫などが配されている場合もある（図8）。

アシネの初期鉄器時代の埋葬資料に関して、顕著な特徴として次の二点を指摘しておきたい。

第一に、原幾何学文様期の墓が多いことである。一般に初期鉄器時代でも遅い時期の方が墓の数が増加する傾向が強いのに対して、アシネは幾何学文様期よりも原幾何学文様期の墓の数が多⁶⁴。

ただし、先にも記したとおり、副葬品が存在しないために時期決定が困難なものが多く、原幾何学文様期と推測されている墓の中に他の時期のものが含まれている可能性は否定できない。また、今後の調査により、幾何学文様期の墓が出土することもあり得よう。それでもなお、アシネの原幾何学文様期における墓の多さは注目される。

第二に、既に原幾何学文様期において集落独自の特徴を有しており、伸展葬が主流であることが指摘される（図8）。これはアルゴスをはじめ屈葬が主流のアルゴリスにおいて例外的な存在であり、固有の習慣を有していたことが見て取れる。原幾何学文様期という初期鉄器時代でも前半期から、アシネはアルゴリスの中で文化的に独立した存在であったと解釈されよう⁶⁵。

このように埋葬資料からは、アシネは鉄器時代に入るとすぐに急速に勢力を伸長したこと、さらに伸展葬に象徴されるように、アルゴスとは一線を画した存在であった可能性を読み取ることができる。その後初期鉄器時代を通じて、アシネとアルゴスはおそらくライバル関係にあったと推測される。

（2）宗教関連の資料

アシネからは初期鉄器時代における宗教や信仰に関する資料が、幾つも見られている。それらはそれぞれが固有の特徴を有しており、この時代の宗教および信仰に関する多少なりとも具体的な姿を垣間見させてくれる。

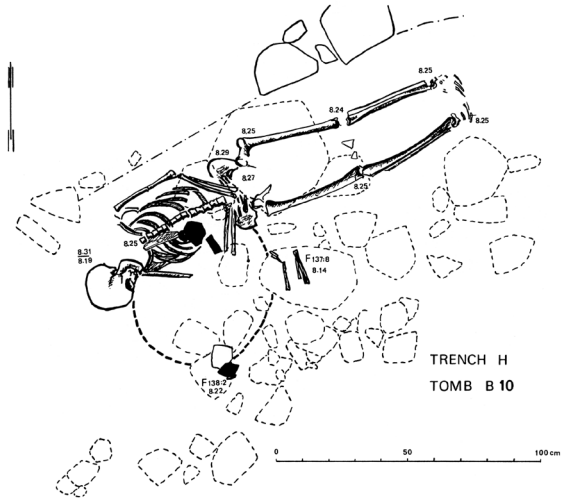


図8 レヴェンティスの原幾何学文様期の墓B10
(出典: *Barbouna* 1, 73, Fig.70, 75, Fig.74)

以下、簡潔に紹介しよう。

①バルブナ頂上の建造物

まず言及すべきは、この集落の主要な宗教施設であったと思われるバルブナの頂上の建造物（Building A）である（図2）。1920年代に発掘されたこの建物は、大きさが9.6×4.3mの長方形で、南側に入口があった。出土遺物から、おそらく前8世紀後期に建造されたと推察されている。機能に関しては、前古典期の鉛製アポロン像が出土したことから神殿であろうと言われており、さらにはパウサニアス（2.36.5）⁶⁶に言及がある聖域であると一般に見なされている⁶⁷。

この場所にはこの建物以前に、おそらく馬蹄形と思われる別の建物（Building B）が存在した。前8世紀半ばごろに建造されたと推察されており、これも宗教関連の施設であったと見なされている。それが取り壊されたあと、長方形の神殿（Building A）が建造された⁶⁸。そしてアルゴスによる破壊のあともその神殿（Building A）は存続し、前5世紀までは人的活動の痕跡が認められる⁶⁹。したがってバルブナの頂上一帯はアシネの人々にとって、少なくとも前8世紀半ば以降数百年にわたって、宗教や信仰に関する中核的な場所であったと言える。

②城壁周辺出土の土器

神殿や聖域ではないが公的な宗教儀式に属する資料として、城壁周辺から出土した遺物が言及されよう。バルブナで二か所、アクロポリスの入口で一か所、合計三か所において、城壁のすぐそばから土器が発見されている。たとえばそのうちの一つであるバルブナの北側斜面の城壁（Wall 2）付近のトレンチ（trench B）からは、幾つもの後期幾何学文様期の土器が城壁に沿うように設置されていた。それらの中には城壁の建造と同時期にその場所に置かれたことが層位的に確認できるものも存在するという⁷⁰。

想像による仮説に過ぎないが、城壁による強固な防御や集落の安全を祈願して献酒などの宗教儀式が執り行われ、その際にそれらの土器が使用されたのではないかと推察されている。十分に可能性がある意見であり、神殿や聖域以外での宗教行為の具体例として注目される⁷¹。

③「幾何学文様期の家」

上記のような公的性格を有する資料とは別の例として、アクロポリスの「幾何学文様期の家（“Geometric House”）」から出土した遺物を紹介したい。こ

の遺構一帯が発掘されたのは1922年であるが、宗教関連の遺物が注目されるようになったのは2002年にB.ウェルズの論文が発表されてからである。「幾何学文様期の家」はアクロポリスの頂上付近に位置しており、複数の部屋から構成されていることや、少なくともその一部は後期青銅器時代の建物の上に建造されたことが明らかとされている。建造年代は、前8世紀であろう。

その名称が示唆するように、この建物は幾何学文様期の土器（図9）が出土した「家屋（house）」と一般に言及されており、神殿や聖域のような宗教施設とは解釈されていない。そのような遺構から、宗教儀式に使用されたと推察される女性像などが発見された。おそらくはバルブナ頂上の神殿における公的な宗教儀式とは異なり、ウェルズが推測しているように私的なそれに使用されたものであろう⁷²。

④円形遺構

バルブナから出土した円形の遺構についても、宗教関連の資料として紹介しておきたい。直径が1～1.5mほどの石造りの円形の遺構であり、同じ場所か

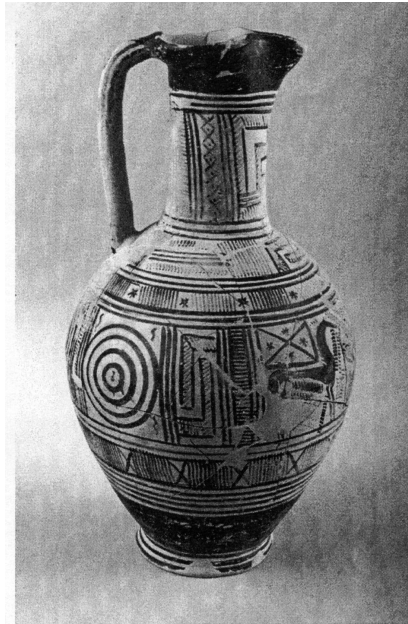


図9 「幾何学文様期の家」出土の土器（出典：Wells 2002, 100, Fig.4）

ら3つほど発見されている。年代はおそらく後期幾何学文様期であるという。その機能に関しては推測の域を出るものではないが、宗教儀式に関連するものである可能性が指摘されている⁷³。

このように初期鉄器時代のアシネにおいては、公私にわたるさまざまな場面で宗教儀式が行われていた。上記の遺物や遺構は、当該期における宗教や信仰に関する具体像を解明していく上で、重要な資料である。さまざまな事柄が議論されようが、現今の資料状況における一つの特徴として、後期幾何学文様期に遺物や遺構が集中していることが注目される。いわゆるポリス成立期であり、政治的または社会的に体制が変化した、または変化しつつあったことを、それは示唆しているとも見なしえよう。

しかしここで忘れてはならないことが、当該期にはアシネとアルゴスとの間の緊張関係がおそらく相当程度に高まっていたと推測されることである。この頃アシネの住民たちはアルゴスによる侵略および攻撃といった危険性をひしひしと感じていた可能性が推察され、それが集落全体の最大の関心事であったのではないか。もしもそうであるならば、かかる不安や危機感がこの時期の宗教行為と無関係であるとは言えないであろう。

それを推測させる事例が、上記の城壁周辺における土器の出土である。城壁を建造しそこで何らかの宗教行為が行われたということは、それにより自分たちの集落が強固な防壁により守られることを祈願したと推察できよう。そしてその背景には、迫りくるアルゴスの脅威が現実味を帯びていた可能性を読み取ることができるのではないか。

今のところアシネの宗教および信仰に関する資料は、後期幾何学文様期に集中している。それにはアルゴスとの緊張関係の高まりがもたらす不安や危機感が、おそらく影響していると推察されよう。

（3）他地域との関係

初期鉄器時代におけるアシネと他地域との接触や交流に関しては、主に土器の分析などから論じられてきた。たとえば、後期幾何学文様期の土器の文様にはアッティカの影響を受けたものが見受けられることが指摘されている⁷⁴。

さらに注目されることは、原幾何学文様期のラコニアの土器が出土していることである⁷⁵。アシネからこの時期のラコニア製の土器が出土していることは、土器の胎土分析からも科学的に検証されている⁷⁶。さらにラコニアとの関係は、

後期青銅器時代III期以来のものである可能性も指摘されており⁷⁷、アシネのみならずアルゴリスの他集落の資料も含めて、より詳細な分析が求められよう。

またキラデス諸島⁷⁸など上記以外の地域との接触や交流もさらなる検討が必要である。

第6章 鉄関連資料

アシネからは鉄に関する重要な資料が幾つも発見されているが、それらは大きく二種類に区分される。すなわち、青銅器時代の遺構から出土した鉄製品と初期鉄器時代における鉄生産関連の資料である。以下、この順番に見ていこう。

①青銅器時代の鉄製品

青銅器時代、すなわちギリシア世界において本格的な鉄の使用が開始される以前の年代の鉄製品は、2つ知られている⁷⁹。1つ目は第3章にて紹介した後期青銅器時代の横穴墓（「ミケーネ時代の墓域I」1号墓）から発掘されたもので、鉄の指輪である⁸⁰。

2つ目はさらに古く、中期青銅器時代III期の墓（No.1970-12）から鉄製品（iron nail）が発見されている。これは一般にギリシアに鉄が普及する時期よりも最低600年はさかのぼる資料であり、どこで製作されたのか、どのような経緯によってアシネにもたらされたのかなど、解明すべき点が多い。第3章において述べた中期青銅器時代におけるアシネの繁栄を視野に入れて、多角的な議論が求められよう⁸¹。

②初期鉄器時代の鉄生産関連資料

アシネにおいては稀有なことに、初期鉄器時代における鉄生産関連の遺物が、調査史の初期段階である1920年代に既に確認されていた⁸²。1926年に低部市街地から製鉄および鉄器製作に関する資料が発見されている。具体的には、鉄滓（スラグ）やふいごの破片などの遺物である。一緒に出土した土器が後期幾何学文様期であったことから、この場所での製鉄および鍛冶作業は前8世紀の最終四半世紀と推察されている⁸³。初期鉄器時代は鉄が本格的に使用されるようになった時代ではあるが、この時代に関する鉄生産に関する資料は現在でも希少であり、ましてや1920年代にこのような資料が出土していたことは注目にあたいる。

そしてさらに1970年代および80年代にかけての調査でも、アクロポリス東方調査区、およびバルブナの裾に位置するサマラスとレヴェンディスの二つの調

査区において鉄滓などが発見された。その年代は、バルブナの二区の遺物は後期幾何学文様期に属する⁸⁴。一方でアクロポリス東方調査区の方は資料状況が複雑であり、中期幾何学文様期もしくは後期幾何学文様期と推察され、そしてある鉄滓に関しては原幾何学文様期にまでさかのぼる可能性もある⁸⁵。もしも原幾何学文様期という初期鉄器時代でも早い時期に、当時の最先端技術である製鉄を既に開始していたのであるならば、それがアシネの発展に多大な影響を与えたことに疑念の余地はない。

ところでアシネでは鉄鉱石は得ることができない。そのため他の地域で採掘された鉱石が使用された。科学的な分析の結果、その場所は南アルゴリスのヘルミオネー帯である蓋然性が最も高いという（図1）。ヘルミオネー帯はアシネから35kmほど南東に位置しているが、海路では重量のある鉄鉱石も容易に運搬が可能であったであろう⁸⁶。

初期鉄器時代において集落が繁栄する要因となったことがらは多様であったと思われるが⁸⁷、アシネにおいては鉄関連技術がその発展および勢力伸長に大きな貢献を果たしたと言えよう。アシネの金属製品および金属関連資料の科学的分析はある程度行われていると見なしているが⁸⁸、鉄製品や製鉄技術に関する研究も今後さらに発展することを期待したい。

おわりに

アシネは中期青銅器時代に繁栄したあと、後期青銅器時代においても大規模な集落であった。ただし、ミケーネを中心とするミケーネ時代のアルゴリスの勢力関係の中では、最上級に属する存在ではなかったと推察される。中期青銅器時代から初期鉄器時代にいたるアシネの勢力を通時的に概観した場合、後期青銅器時代に比して、中期青銅器時代と初期鉄器時代にはより繁栄を謳歌していたと言えるであろう。アルゴスも同様の資料傾向を示しており、少なくともアルゴスにおいては、中期青銅器時代と初期鉄器時代には繁栄するための要素に共通性がある一方で、ミケーネ時代においてはそれが異なっていた可能性があるのではないかと。

初期鉄器時代に入るとアシネは急速に勢力を伸長し、アルゴスと覇権を競う大集落へと成長する。そしてその繁栄には、鉄生産が大きく影響していたことは想像に難くない。

初期鉄器時代のアシネは、埋葬習慣に顕著にうかがわれるように、アルゴスの中で独自の文化的特徴を有していた。独立性の高いこのような傾向は、原

幾何学文様期において既に観察されうる。ということは初期鉄器時代でも早い時期からアシネはアルゴスとは一線を画した存在であり、ひいてはライバル関係にあったのではないか。

また今までのところ、後期幾何学文様期に宗教や信仰に関する遺物や遺構が集中的に発見されている。その背景には、いわゆるポリス成立期における政治的または社会的変化を読み取ることも可能であろうが、むしろ、アルゴスとの緊張関係の高まりが大きく影響していたと推察されよう。迫りくるアルゴスの脅威に苦悩したアシネの人々の強い不安や危機感が、この時期の宗教行為と無関係であったとは思われない。

そして最終的に前8世紀の後期に、おそらくアシネはアルゴスによって攻撃および破壊されたと推測されている。

アシネは初期鉄器時代における集落像を総体的に検討しうる重要な遺跡である。アルゴスなどアルゴリスの他遺跡との比較検討なども行い、今後も研究を積み重ねていきたい。

- 1 本稿は、ギリシアの初期鉄器時代の遺跡に関するシリーズの三番目の業績である。最初の二つの業績は、拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（1）アテネのアゴラ」『史苑』第72巻第1号、2011、99-160（以下、「アゴラ」）、拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（2）レフカンディ」『史苑』第77巻第2号、2017、35-78（以下、「レフカンディ」）。
- 2 「レフカンディ」45-46。
- 3 Renaudin 1921.
- 4 *Asine* I.
- 5 Nordquist & Hägg 1996, 13.
- 6 *Asine* III.2, 15, Nordquist & Hägg 1996, 13.
- 7 1930年までの調査史に関しては、Nordquist & Hägg 1996, Wells 2002a.
- 8 1970～1972年にかけてのレヴェンディイスでの調査の概要に関しては、cf. *Barbouna* 1.
- 9 1970～1974年にかけてのアクロポリスから東方方向に位置する区域での発掘の概要に関しては、cf. *Asine* II.1.
- 10 Penttinen 1996.
- 11 たとえば、*AD* 25 (1970), 1972, 157-158, *AD* 50, B'1 (1995), 2000, 103-104, *AD* 51, B'1 (1996), 2001, 90-92. また発掘ではないがギリシア人研究者の報告として、Protonotariou-Deilaki 1961.
- 12 Hägg 2002, Wells 2002a.
- 13 Hägg & Nordquist 1992, 59, 63.

- 14 Gauss 2010.
- 15 Lindblom 2002, Dorais, Lindblom & Shriner 2004.
- 16 *Barbouna* 2, chap.I, 11-52.
- 17 アシネの初期青銅器時代に関する関連文献として、Pullen 1987, 1990. また初期青銅器時代および中期青銅器時代への移行期に関する関連文献として、Macheridis 2016.
- 18 ホメロス『イリアス（上）』松平千秋訳、岩波書店、1992、68.
- 19 Zangger 1994, esp.232.
- 20 城壁に関する調査に関しては、Wells 1992.
- 21 Kelly 1967.
 アルゴスがドーリス系であるのに対して、アシネはドリリュオベス系であると言われている。この点に関してはパウサニアス（4.8.3, 4.34.9）を参照。さらに、アルゴリスのアシネに関する記述ではないが、関連史料としてヘロドトス（8.73）がある。またこの問題に関しては、cf. Hall 1997, 74-77.
- 22 Wells 1987-1988, 1990.
- 23 Cf. *Barbouna* 4, 129-131.
- 24 Wells 1992.
- 25 *Asine* I, 105-112, Höghammar 1984.
- 26 Nordquist 1987, 108.
- 27 Mee 2011, 73-75.
- 28 中期青銅器時代の埋葬資料に関する文献として、たとえば、Nordquist 1987, chap.8, 91-106, List of Graves, 128-136, 1990, 1996.
- 29 たとえば、*Asine* III.2.
- 30 アシネの塚に関する業績として、Dietz 1975, Voutsaki, Dietz & Nijboer 2009, Voutsaki, Ingvarsson-Sundström, Dietz 2011.
- 31 既に言及したものの以外に、たとえば、*Barbouna* 2, chap.II, *Asine* II.2, Nordquist 1991.
- 32 このプロジェクトに関しては、Voutsaki 2003, Voutsaki, Triantaphyllou & Milka 2004, Voutsaki, Triantaphyllou, Ingvarsson-Sundström, Kouidou-Andreou, Kovatsi, Nijboer, Nikou & Milka 2005, Voutsaki, Triantaphyllou, Ingvarsson-Sundström, Sarri, Richards, Nijboer, Kouidou-Andreou, Kovatsi, Nikou & Milka 2006, Voutsaki, Ingvarsson-Sundström & Richards 2007, Voutsaki 2016.
- 33 Ingvarsson-Sundström, Richards & Voutsaki 2009, Ingvarsson-Sundström 2010, Voutsaki 2010, Ingvarsson-Sundström, Voutsaki & Milka 2013. 塚に関しては、註30に記載（Dietz 1975 以外の文献）。
- 34 アシネをも含むアルゴリスにおける中期青銅器時代から後期青銅器時代への移行期に関する重要な研究として、Dietz 1991.
- 35 埋葬資料に見られるアシネの中期青銅器時代と後期青銅器時代を比較および分析している研究として、Nordquist 2002.
- 36 *Asine* I, 151-192, 356-421. さらに、cf. Gillis 1996, 2013, Krzyszkowska 1996.
- 37 TI : 1 に関しては、*Asine* I, 154-161, 359-377, Gillis 1994, Mountjoy 1996, Hughes-Brock 1996, Sjöberg 2004, 92-97.
- 38 Sjöberg 1997.

- 39 Schallin 2004.
- 40 後期青銅器時代のアシネに関する業績として、Sjöberg 2002, 2004.
- 41 ただし、何らかの文字と推察される印が刻された土器が発見されていることは特筆にあたいする。Cf. Frizell 1977.
- 42 Cf. Takahashi 2009, esp. chap.5.
- 43 拙稿「鉄の時代へ —ギリシアの初期鉄器時代に関する研究動向」『西洋史研究』新輯第33号、2004（「鉄の時代へ」と略）、102-104。
- 44 Mountjoy 1999, 67.
- 45 *Asine* II.1, 60-62, *Asine* II.4.2, 25-26, Fig.7.
- 46 *Barbouna* 4, 43-49. この報告でも他の文献（たとえば、Penttinen 1996, 166, n.14）においても亜ミケーネ期と記載されていることがあるが、マウントジョイは後期青銅器時代 III C 期に分類している（Mountjoy 1999, 67, n.116）。
- 47 Hägg 1981, D'Agata 1996, Sjöberg 2004, 31-34, Thomatos 2006, 215, 223.
- 48 D'Agata 1996, esp.46.
- 49 拙稿「青銅器時代終末期におけるティリンス —建造物T、「ティリンスの宝物」、クレタ製粗製鍍壺に関する資料紹介—」『西洋史研究』新輯第43号、2014、146-147。
- 50 Sjöberg 2004, 33.
- 51 Styrenius 1967, esp. 127-136, 157-158, 160-163.
- 52 Cf. Styrenius & Vidén 1971, 148.
- 53 Styrenius 1975, 183. さらに、cf. Frizell 1979.
- 54 Styrenius 1982, 8.
- 55 Cf. French 1988.
- 56 Mountjoy 1999, 67.
- 57 アクロポリス東方調査区の他の報告書における亜ミケーネ期に関する記載として、*Asine* II.4.2, 123-124. またこの報告書（*Asine* II.4.2）に関する書評として、cf. Coldstream 1985.
- 58 Mountjoy 1996, 62.
- 59 この項で言及した以外の亜ミケーネ期に関する報告として、たとえば、Ålin 1968, 104. ただし、土器片の写真や図版は掲載されていない。
- 60 Cf. Takahashi 2009.
- 61 アゴラに関しては、「アゴラ」を参照。
- 62 *Asine* II.4.2.
- 63 初期鉄器時代の墓に関する報告（またはそれが含まれているもの）として、*Asine* I, Hägg 1965, *Barbouna* I, *Asine* II.4.1. また研究文献として、Hägg 1974, 47-56.
- 64 幾何学文様期の墓に関しては、cf. Hägg 1974, 48, 53-55, Foley 1988, 44-45, 220-221.
- 65 アシネの文化的独立性に関しては、cf. Hall 1997, 136-137.
- 66 パウサニアスは「…アルゴス人はアシネの町を徹底的にたたき潰して、その国土を自領に併合した。だが、アポロンの子のピュタエウスの聖所はそのまま存続を許して—いまでもよく見える—、…」と記している（パウサニアス『ギリシア案内記』（下）馬場恵二訳、岩波文庫、1992、167）。
- 67 *Asine* I, 148-151, Wells, 1987-1988. Cf. Mazarakis Ainian 1997, 162.

- 68 Wells 1987-1988, 350. Cf. Mazarakis Ainian 1997, 71.
- 69 Wells 1987-1988, 350, 1990.
- 70 Wells 1988, 261.
- 71 Wells 1988.
- 72 Wells 2002b, esp. 97-104, 131.
- 73 Hägg 1983. また、この業績の最後の「質疑応答 (Discussion)」部分において、B.ウェルズが同様の遺構がアシネのアクロポリス東方調査区からも出土していることに言及している (Hägg 1983, 193)。
- 74 *Barbouna* 2, 120, *Coldstream* 2008, 132.
- 75 *Asine* II.4.2, 42, 64, 112. Cf. Pettersson 1992, 99-100.
- 76 *Asine* II.4.2, appendix, 137-148.
- 77 *Asine* II.4.2, 42, 122.
- 78 *Asine* II.4.2, 37, 121, appendix, 137-148.
- 79 これらの資料に関しては、別稿にて言及したことがある (「鉄の時代へ」96)。
- 80 *Asine* III.1, 74. ただし、この墓は鉄器時代への移行期とも言える亜ミケーネ期にも使用されていた可能性があり (Mountjoy 1996, 62, 64)、鉄製遺物の年代に関しては慎重な検討が求められよう。
- 81 Voutsaki, Ingvarsson-Sundström, Dietz 2011, 450, Table 4. さらに、cf. *Asine* II.2, 30, 84.
- 82 これらの資料に関しては、別稿にて言及したことがある (「鉄の時代へ」99)。
- 83 Backe-Forsberg & Risberg 1986, Backe-Forsberg, Risberg & Bassiakos 2000-2001, 26, Backe-Forsberg & Risberg 2002, 85-87.
- 84 Backe-Forsberg, Risberg & Bassiakos 2000-2001, 28-29.
- 85 アクロポリス東方調査区の鉄関連資料およびその年代にまつわる問題に関しては、*Asine* II.1, 39, 89, 93, Backe-Forsberg, Risberg & Bassiakos 2000-2001, 28. また原幾何学文様期にまでさかのぼる可能性がある遺物については、*Asine* II.4.2, 80, 122, *Asine* II.4.3, 227.
- 86 Risberg 1995, 129-131, Backe-Forsberg, Risberg & Bassiakos 2000-2001, Backe-Forsberg & Risberg 2002.
南アルゴリスにおける鉄関連資料に言及がある文献として、Jameson, Runnels & van Andel 1994, 302. またヘルミオネはヘロドトス (8.73.2) にアシネ同様にドリュオベス系と記されているが、アシネとの関係に関しては、cf. Jameson, Runnels & van Andel 1994, 63-66.
- 87 たとえばアテネ中心部の土器生産やエウボイア島のレフカンディにおける青銅器生産などが言及されよう (「レフカンディ」56)。
- 88 たとえば、Gillis 2002.

略記一覧

- Asine* I O.Frödin & A.W.Persson, *Asine: Results of the Swedish Excavations 1922-1930*, Stockholm, 1938.
- Asine* II.1 S.Dietz, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.1: *General Stratigraphical Analysis and Architectural Remains*, Stockholm, 1982.
- Asine* II.2 S.Dietz, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.2: *The Middle Helladic Cemetery, the Middle Helladic and Early Mycenaean Deposits*, Stockholm, 1980.
- Asine* II.3 B.S.Frizell, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.3: *The Late and Final Mycenaean Periods*, Stockholm, 1986.
- Asine* II.4.1 B.Wells, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc. 4: *The Protogeometric Period*, Part1: *The Tombs*, Stockholm, 1976.
- Asine* II.4.2 B.Wells, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.4: *The Protogeometric Period*, Part 2: *An Analysis of the Settlement*, Stockholm, 1983.
- Asine* II.4.3 B.Wells, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.4: *The Protogeometric Period*, Part 3: *Catalogue of Pottery and Other Artefacts*, Stockholm, 1983.
- Asine* III.1 R.Hägg, G.C.Nordquist & B.Wells eds., *Asine III: Supplementary Studies on the Swedish Excavations 1922-1930*, Fasc. 1, Stockholm, 1996.
- Asine* III.2 A.Ingvarsson-Sundström, *Asine III: Supplementary Studies on the Swedish Excavations 1922-1930*, Fasc. 2: *Children Lost and Found— A Bioarchaeological Study of Middle Helladic Children in Asine with a Comparison to Lerna*, Stockholm, 2008.
- Barbouna* 1 I.Hägg, R.Hägg & D.Bannert, *Excavations in the Barbouna Area at Asine*, Fascicle 1: *General Introduction, Bibliography, Geological Background and a Report on the Field-work in the Levendis Sector, 1970-72*, I.Hägg & R.Hägg eds., Boreas 4:1, Uppsala, 1973.
- Barbouna* 2 Y.Backe-Forsberg et al., *Excavations in the Barbouna Area at Asine*, Fascicle 2: *Finds from the Levendis Sector, 1970-72*, I.Hägg & R.Hägg eds., Boreas 4:2, Uppsala, 1978.
- Barbouna* 4 I.Hägg & J.M.Fossey, *Excavations in the Barbouna Area at Asine*, Fascicle 4: *The Hellenistic Nekropolis and Later Structures on the Middle Slopes, 1973-77*, I.Hägg & R.Hägg eds., Boreas 4:4, Uppsala, 1980.

文献一覧

- Ålin, P. 1968: Unpublished Mycenaean Sherds from Asine, *Opuscula Atheniensiensia* 8, 87-105.
- Backe-Forsberg, Y. & C.Risberg 1986: Metal Working at Asine: 'New' Finds from the 1926 Season, *Opuscula Atheniensiensia* 16, 123-125.
- 2002: Archaeometallurgical Methods Applied to Remains of Iron Production from the Geometric Period at Asine, in Wells ed. 2002, 85-94.
- Backe-Forsberg, Y., C.Risberg & Y.Bassiakos 2000-2001: Metal-Working at Asine: Report on the Remains of Iron Production from the Barbouna Area and the Area East of the Acropolis, *Opuscula Atheniensiensia* 25-26, 25-34.
- Barrett, W.S. 1954: Bacchylides, Asine, and Apollo Pythaeus, *Hermes* 82, 421-444.
- Coldstream, J.N. 1985: Review: "Asine. 2. Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974. Fasc.4. The Protogeometric Period. Part 2. An Analysis of the Settlement. Part 3. Catalogue of Pottery and Other Artefacts. By B.Wells", *JHS* 105, 235.
- 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and Their Chronology*, updated second ed., Exeter.
- D'Agata, A.L. 1996: The "Lord" of Asine Reconsidered: Technique, Type and Chronology, in *Asine* III.1, 39-46.
- Dietz, S. 1975: A Bronze Age Tumulus Cemetery in Asine, Southern Greece, *Archaeology* 28, 157-163.
- 1991: *The Argolid at the Transition to the Mycenaean Age: Studies in the Chronology and Cultural Development in the Shaft Grave Period*, Copenhagen.
- Dorais, M.J., M.Lindblom & C.M.Shriner 2004: Evidence for a Single Clay/Temper Source for the Manufacture of Middle and Late Helladic Aeginetan Pottery from Asine, Greece, *Geoarchaeology: An International Journal*, 19 (7), 657-684.
- Foley, A. 1988: *The Argolid 800-600 B.C.: An Archaeological Survey— Together with an Index of Sites from Neolithic to the Roman Period*, Göteborg.
- French, E. 1988: Review: "B.S.Frizell: *Asine II, Results of the Excavations East of the Acropolis, 1970-1974, Fasc. 3: The Late and Final Mycenaean Periods*", *The Classical Review* (N.S.) 38 (2), 444-445.
- Frizell, B. 1977: A Late Helladic Graffito from Asine, *Kadmos* 16 (2), 176-178.
- 1979: Evidence for the Existence of a Submycenaean Phase at Asine, in J.N.Coldstream & M.A.R.Colledge eds., *Acta of the XI International Congress of Classical Archaeology*, London, 185.
- Gauss, W. 2010: Aegina Kolonna, in E.H.Cline ed., *The Oxford Handbook of the Bronze Age Aegean (ca. 3000-1000 BC)*, Oxford, chap.55, 737-751.
- Gillis, C. 1994: Binding Evidence: Tin Foil and Organic Binders on Aegean Late Bronze Age Pottery, *Opuscula Atheniensiensia* 20, 57-61.
- 1996: Tin at Asine, in *Asine* III.1, 93-100
- 2002: A Diachronic Study of Metals from Asine: Provenances and Implications, in Wells ed. 2002, 71-84.

- 2013: Colorful Asine, in A.-L. Schallin ed., *Perspectives on Ancient Greece: Papers in Celebration of the 60th Anniversary of the Swedish Institute at Athens*, Stockholm, 61-88.
- Hägg, R. 1965: Geometrische Gräber von Asine, *Opuscula Atheniensiä* 6, 117-138.
- 1974: *Die Gräber der Argolis: in Submykenischer, Protogeometrischer und Geometrischer Zeit: 1.Lage und Form der Gräber*, Uppsala.
- 1981: The House Sanctuary at Asine Revisited, in R. Hägg & N.Marinatos eds., *Sanctuaries and Cults in the Aegean Bronze Age: Proceedings of the First International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 12-13 May, 1980*, Stockholm, 91-94.
- 1983: Funerary Meals in the Geometric Necropolis at Asine?, in R. Hägg ed., *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.: Tradition and Innovation—Proceedings of the Second International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 1-5 June, 1981*, Stockholm, 189-194.
- 2002: Swedish Archaeology in Greece, 1894-1994, in R. Hägg ed., *Peloponnesian Sanctuaries and Cults: Proceedings of the Ninth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June 1994*, Stockholm, 9-13.
- Hägg, R. & G.C.Nordquist 1992: Excavations in the Levendis Sector at Asine, 1989, *Opuscula Atheniensiä* 19, 59-68.
- Hägg, R. & G.C.Nordquist eds. 1990: *Celebrations of Death and Divinity in the Bronze Age Argolid: Proceedings of the Sixth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June, 1988*, Stockholm.
- Hall, J.M. 1997: *Ethnic Identity in Greek Antiquity*, Cambridge.
- Höghammar, K. 1984: The Dating of the Roman Bath at Asine in Argolis, *Opuscula Atheniensiä* 15, 79-106.
- Hughes-Brock, H. 1996: Asine Chamber Tomb I:1. The Small Finds, in *Asine* III.1, 69-80.
- Ingvarsson-Sundström, A. 2010: Tooth Counts and Individuals: Health Status in the East Cemetery and Barbouna at Asine as Interpreted from Teeth, in G.Touchais et al. eds., *Mesohelladika: The Greek Mainland in the Middle Bronze Age*, BCH Suppl. 52, 471-477.
- Ingvarsson-Sundström, A., M.P.Richards & S.Voutsaki 2009: Stable Isotope Analysis of the Middle Helladic Population from Two Cemeteries at Asine: Barbouna and the East Cemetery, *Mediterranean Archaeology and Archaeometry* 9 (2), 1-14.
- Ingvarsson-Sundström, A., S.Voutsaki & E.Milka 2013: Diet, Health and Social Differentiation in Middle Helladic Asine: A Bioarchaeological View, in S.Voutsaki & S.Maria Valamoti eds., *Diet, Economy and Society in the Ancient Greek World: Towards a Better Integration of Archaeology and Science*, Pharos Suppl. 1, Leuven, Paris & Walpole, 149-161.
- Jameson, M.H., C.N.Runnels & T.H. van Andel 1994: *A Greek Countryside: The Southern Argolid from Prehistory to the Present Day*, Stanford.
- Kelly, T. 1967: The Argive Destruction of Asine, *Historia* 16, 422-431.

- Krzyszowska, O.H. 1996: Asine Chamber Tomb I:2: The Ivories, in *Asine* III.1, 81-90.
- Lindblom, M. 2002: Aeginetan Potters' Marks at Asine: a Pilot Study, in Wells ed. 2002, 31-42.
- Macheridis, S. 2016: Home, Refuse, and Reuse during the Early Helladic III to the Middle Helladic I Transitional Period: A Social Zooarchaeological Study of the Asine *Bothroi*, *Opuscula* 9, 71-91.
- Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsered.
- Mee, C. 2011: *Greek Archaeology: A Thematic Approach*, West Sussex.
- Mountjoy, P.A. 1996: Asine Chamber Tomb I:1: The Pottery, in *Asine* III.1, 47-67.
- 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden/Westf.
- Nordquist, G.C. 1987: *A Middle Helladic Village: Asine in the Argolid*, Boreas 16, Uppsala.
- 1990: Middle Helladic Burial Rites: Some Speculations, in Hägg & Nordquist eds. 1990, 35-41.
- 1991: New Middle Helladic Finds from Asine, *Hydra* 8, 31-34.
- 1996: New Information on Old Graves, in *Asine* III.1, 19-38.
- 2002: Intra- and Extramural, Single and Collective, Burials in the Middle and Late Helladic Periods, in Wells ed. 2002, 23-29.
- Nordquist, G.C. & R.Hägg 1996: The History of the Asine Excavations and Collections, with a Bibliography, in *Asine* III.1, 11-18.
- Penttinen, A. 1996: Excavations on the Acropolis of Asine in 1990, *Opuscula Atheniensia* 21, 149-167.
- Pettersson, M. 1992: *Cults of Apollo at Sparta: The Hyakinthia, the Gymnopaïdai and the Karneia*, Stockholm.
- Protonotariou-Deilaki, E. 1961: Χαλκοῦν Γεωμετρικὸν Εἰδῶλιον ἐξ Ἀσίνης, *AE* 1953-1954, III, 318-320.
- Pullen, D.J. 1987: Asine, Berbati, and the Chronology of Early Bronze Age Greece, *AJA* 91, 533-544.
- 1990: Early Helladic Burials at Asine and Early Bronze Age Mortuary Practices, in Hägg & Nordquist eds. 1990, 9-12.
- Renaudin, L. 1921: Note sur le Site d'Asinè en Argolide, *BCH* 45, 295-308.
- Risberg, C. 1995: Production and Trade at Asine, in C.Gillis, C. Risberg & B.Sjöberg eds., *Trade and Production in Premonetary Greece: Aspects of Trade— Proceedings of the Third International Workshop, Athens 1993*, Studies in Mediterranean Archaeology and Literature, Pocket-Book 134, Jonsered, 129-138.
- Schallin, A.-L. 2004: Presenting the Various Types of Terracotta Bovine Figurines from Late Bronze Age Asine, in B.S.Frizell ed., *PECUS. Man and Animal in Antiquity: Proceedings of the Conference at the Swedish Institute in Rome, September 9-12, 2002*, Rome, 259-264.
- Sjöberg, B. 1997: Two Possible Late Helladic Kilns at Asine: a Research Note, in C.Gillis, C.Risberg & B.Sjöberg eds., *Trade and Production in Premonetary Greece:*

Production and the Craftsman— Proceedings of the 4th and 5th International Workshops, Athens, 1994 and 1995, Jonsered, 89-100.

——— 2002: Economic Interaction on the Argive Plain. A Research Note on Late Helladic Asine, in Wells ed. 2002, 57-69.

——— 2004: *Asine and the Argolid in the Late Helladic III Period: A Socio-Economic Study*, BAR International Series 1225, Oxford.

Styrenius, C.-G. 1967: *Submycenaean Studies*, Lund.

——— 1975: Some Notes on the New Excavations at Asine, *Opuscula Atheniensia* 11, 177-183.

——— 1982: Preface, in *Asine* II.1, 7-11.

——— 1998: *Asine: A Swedish Excavation Site in Greece*, Stockholm.

Styrenius, C.-G. & A.Vidén 1971: New Excavations at Asine, *AAA* 4, 147-148.

Takahashi, Y. 2009: *Τα Έθιμα Ταφής στην Αργολίδα: Από την Μετανακτορική έως και την Προτογεωμετρική Περίοδο*, Ph.D thesis, University of Athens.

Thomatos, M. 2006: *The Final Revival of the Aegean Bronze Age: A Case Study of the Argolid, Corinthia, Attica, Euboea, the Cyclades and the Dodecanese during LHIIIC Middle*, BAR International Series 1498, Oxford.

Voutsaki, S. 2003: Lerna, 2000-1500 BC: A Pilot Analysis of Funerary Skeletal and Bio-Molecular Data, *Pharos* 11, 75-80.

——— 2010: The Domestic Economy in Middle Helladic Asine, in G.Touchais et al. eds., *Mesohelladika: The Greek Mainland in the Middle Bronze Age*, *BCH* Suppl. 52, 1-17.

——— 2016: Social Change in the Middle Helladic Mainland, *BICS* 59, 138-139.

Voutsaki, S., S.Dietz & A.J.Nijboer 2009: Radiocarbon Analysis and the History of the East Cemetery, Asine, *Opuscula* 2, published in 2010, 31-56.

Voutsaki, S., A.Ingvarsson-Sundström, S.Dietz 2011: Tumuli and Social Status: A Re-examination of the Asine Tumulus, in E. Borgna & S. Müller Celka eds., *Ancestral Landscapes: Burial Mounds in the Copper and Bronze Ages (Central and Eastern Europe – Balkans – Adriatic – Aegean, 4th-2nd Millennium B.C.)*, Travaux de la Maison de l'Orient et de la Méditerranée 58, Lyon, 445-461.

Voutsaki, S., A.Ingvarsson-Sundström & M.Richards 2007: Project on the Middle Helladic Argolid: A Report on the 2007 Season, *Pharos* 15, published in 2009, 137-152

Voutsaki, S., S.Triantaphyllou, A.Ingvarsson-Sundström, S. Kouidou-Andreou, L.Kovatsi, A.Nijboer, D.Nikou & E.Milka 2005: Project on the Middle Helladic Argolid: A Report on the 2005 Season, *Pharos* 13, 93-117.

Voutsaki, S., S.Triantaphyllou, A.Ingvarsson-Sundström, K.Sarri, M.Richards, A.Nijboer, S.Kouidou-Andreou, L.Kovatsi, D.Nikou & E.Milka 2006: Project on the Middle Helladic Argolid: A Report on the 2006 Season, *Pharos* 14, 59-99.

Voutsaki, S., S.Triantaphyllou & E.Milka 2004: Project on the Middle Helladic Argolid: A Report on the 2004 Season, *Pharos* 12, 31-40.

Wells, B. 1987-1988: Apollo at Asine, in *Πρακτικά του Γ' Διεθνούς Συνεδρίου Πελοποννησιακών Σπουδών, Καλαμάτα, 8-15 Σεπτεμβρίου, 1985, Β', Πελοποννησιακά*

- 13, Παράρτημα, Athens, 349-352.
- 1988: Early Greek Building Sacrifices, in R.Hägg et al. eds., *Early Greek Cult Practice: Proceedings of the Fifth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 26-29 June, 1986*, Stockholm, 259-266.
- 1990: The Asine Sima, in N.A.Winter ed., *Proceedings of the First International Conference on Archaic Greek Architectural Terracottas, December 2-4, 1988*, *Hesperia* 59, 157-161.
- 1992: The Walls of Asine, *Opuscula Atheniensia* 19, 135-142.
- 2002a: The Prehistory of the Swedish Institute at Athens, in Wells ed. 2002, 9-22.
- 2002b: Evidence for Cult at the Acropolis of Asine from Late Geometric through Archaic and Classical Times, in Wells ed. 2002, 95-133.
- Wells, B. ed. 2002: *New Research on Old Material from Asine and Berbat: in Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Swedish Institute at Athens*, Stockholm.
- Zangger, E. 1994: The Island of Asine: A Palaeogeographic Reconstruction, *Opuscula Atheniensia* 20, 221-239.

